

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中世高地ドイツ語における数意識の構造 : Iweinをテキストとして
Author(s)	田村, 泰男
Citation	ニダバ , 15 : 27 - 37
Issue Date	1986-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047173
Right	
Relation	



中世高地ドイツ語における数意識の構造

— Iwein をテキストとして —

田 村 泰 男

はじめに

主語 (Subjekt) と述語動詞 (Pradikatsverbum) との呼応 (Kongruenz) の問題は、中世高地ドイツ語 (Mittelhochdeutsch, 以下 Mhd. と略称) においても、統語論や意味論の領域で大いに興味をひかれるテーマである。「主語と述語動詞は数 (Numerus) と人称 (Person) の両方で一致せねばならない」という原則は Mhd. においても存在するが、実際に文学作品を読んでいくと、この原則は必ずしも首尾一貫している訳ではない。

Swer an rehte guete 本当の善に心を向ける者には誰であれ,
wendet sin gemuete, 幸福と名誉がついてくる。
dem volget saelde und ere. (Iwein 1-3)

そこで本稿では、主語と述語動詞の間の数の呼応に照準をあて、語順並びに主語を構成する名詞の意味論的分析を中心に、Mhd. 期における言語使用者の数意識を探っていこうと思う。資料としては、Mhd. 期の代表的韻文 Iwein (以下, Iw. と略称) (全 8166 行) を用いることとする。

1. 用例分類

まず、単数 (sg.) の主語に対して複数 (pl.) の述語動詞が置かれている例と、複数の主語に対して単数の動詞が置かれている例とに分けてみよう。

(表 - 1) ⁽¹⁾

主語 sg. ・ 動詞 pl.	主語 pl. ・ 動詞 sg.	計
8	80	88

この表から、文法上の不一致の用例の大多数は、複数の主語に対して単数の述語動詞が置かれたものであるということがわかる。

さらに用例を分類すると次のようになる。

(1) 主語 sg.・動詞 pl.

- i) Vorläufer des Subjektes “ez”⁽²⁾が存在する場合 2例
- ii) Vorläufer des Subjektes “ez” が存在しない場合 6例

(2) 主語 pl.・動詞 sg.

- i) 主語が1個の名詞で複数形の場合 1例
- ii) 主語が3個以上の単数形の名詞から成る場合 4例
- iii) 主語が2個の単数形の名詞から成る場合 75例

[“ez”が存在する場合 4例]
 [“ez”が存在しない場合 71例]

II. 語順に関する分析 (“ez”の存在する用例は除く)

ここで、主語をS、述語動詞をVとして、主語が述語動詞に先行する場合をS-V型、述語動詞が主語に先行する場合をV-S型と呼ぶことにする。また、主語が2個の名詞から成る場合には、その主語を S_1-S_2 とし、3個以上の名詞から成る場合には $S_1\cdots S_n$ ($n \geq 3$)と表記し、動詞との位置関係から、それぞれを S_1-S_2-V 型、 $V-S_1-S_2$ 型； $S_1\cdots S_n-V$ 型、 $V-S_1\cdots S_n$ 型と呼ぶことにする。

(1) 主語 sg.・動詞 pl.

(表-2)

動詞が韻 ⁽³⁾ を踏んでいない場合		動詞が韻を踏んでいる場合	
S-V	V-S	S-V	V-S
5	1	0	0

(2) 主語 pl.・動詞 sg.

i) 主語が1個の名詞で複数形の場合

V-S型で、動詞は韻を踏んでいない。

ii) 主語が3個以上の単数形の名詞から成る場合

(表-3)

動詞が韻を踏んでいない場合		動詞が韻を踏んでいる場合	
$S_1\cdots S_n-V$	$V-S_1\cdots S_n$	$S_1\cdots S_n-V$	$V-S_1\cdots S_n$
0	4	0	0

($n \geq 3$)

iii) 主語が2個の単数形の名詞から成る場合

(表-4)

動詞が韻を踏んでいない場合		動詞が韻を踏んでいる場合	
$S_1 - S_2 - V$	$V - S_1 - S_2$	$S_1 - S_2 - V$	$V - S_1 - S_2$
8	49	11	3

(表-2)(表-3)に関しては用例数が少ないので確としたことは言えないが、(表-4)からは次のことが明らかである。即ち、動詞が韻を踏んでいない場合は、57例中49例(86.0%)と $V - S_1 - S_2$ 型が多く、韻を踏んでいる場合は、14例中11例(78.6%)と $S_1 - S_2 - V$ 型が多い。

上記の如く、数の呼応が崩れている場合は、全体で88例(表-1参照)あったが、このうち大多数(71例)は、主語が2個の名詞(いずれも単数形)で構成され、動詞が単数形という場合であった。そこで次に、主語が同じ条件(2個の単数形の名詞で構成される)で動詞が複数形である場合⁽⁴⁾を表にして(表-4)と比較してみよう。

(表-5)

動詞が韻を踏んでいない場合		動詞が韻を踏んでいる場合	
$S_1 - S_2 - V$	$V - S_1 - S_2$	$S_1 - S_2 - V$	$V - S_1 - S_2$
12	1	1	0

(表-4)と(表-5)の比較から言えることは、同じ条件の主語に対して単数の動詞が置かれる場合は、71例中52例(73.2%)が $V - S_1 - S_2$ 型、複数の動詞が置かれる場合は、14例中13例(92.9%)が $S_1 - S_2 - V$ 型と逆の傾向を示しているということである。

III. 主語名詞と脚韻の関係について

(“ez”の存在する用例は除く)

ここでは、主語が2個の単数形の名詞で構成され、動詞が単数形の場合において、 S_1, S_2 が脚韻部に位置するのかもしれないかという問題をみていこうと思う。

(表-4)で得られた結果を、主語名詞と脚韻との関りから分類すると次のようになる。

(表-6)

		S_1 だけが韻を踏む場合	S_2 だけが韻を踏む場合	S_1, S_2 両方が韻を踏む場合	S_1, S_2 いずれも韻を踏まない場合
動詞が韻を踏んでいない場合	$S_1 - S_2 - V$	1	7	0	0
	$V - S_1 - S_2$	1	46	1	1
動詞が韻を踏んでいる場合	$S_1 - S_2 - V$	0	9	0	2
	$V - S_1 - S_2$	0	3	0	0
計		2	65	1	3

- ・ nû daz sîn iuwer êre. それがあなたの名誉であるならば。(Iw. 2528)
- ・ diz sint cleider der ich gnuoc これは、私が夢の中で始終着ていた
in mînem troume dicke truoc. ような着物だ。(Iw. 3587-3588)
- ・ wan ez sint drî starke man なぜなら、敵はそろって私を糾弾している
die mich alle sprechent. 3人の豪勇の騎士なのです。(Iw. 4085-4086)
- ・ daz sint ouch zwêne selhe man, それはまた2人の騎士なのです。(Iw. 4092)

これらの4例は、主語が代名詞の単数形、動詞が Kopula の3人称複数形の場合である。また、補語となっているものは、いずれも複数形であり、不一致の原因としては、この補語の Attraktion⁽⁷⁾ が、まず考えられる。

(2) 主語 pl.・動詞 sg.

i) 主語が1個の名詞で複数形の場合

- ・ dâ wart vil gestochen そこで槍は何度もつかれたのですっかり
und gar diu sper zebrochen. 折れてしまった。(Iw. 7113-7114)

この用例は、文法的には複数形である主語名詞が、意味内容から一まとまりのもののみなされ、動詞が単数形になっている例であると考えられる。

ii) 主語が2個の単数形の名詞から成る場合

分類の方法としては、まず主語を構成する名詞を生物か無生物かで分け、さらにその下位区分を置くことにする。

A. 生物

- A - 1 動物・鳥・昆虫
- A - 2 人間
- A - 3 超自然的な存在

B. 無生物

- B - 1 自然現象
- B - 2 具象名詞
- B - 3 抽象名詞

これに従って分類すると次のようになる。

(表-7)

A. 生物 (20例)			B. 無生物 (55例)		
A - 1	A - 2	A - 3	B - 1	B - 2	B - 3
0	17	3	5	2	48

A. 生物

A - 1 動物・鳥・昆虫

主語を構成する2個の名詞S₁, S₂の両方がこの項目に該当する用例も、一方だけが該当する用例も存在しなかった。

A - 2 人間 (以下, 用例数が 2 以上の場合のみ, その表示をする)

1) S_1, S_2 両方が人間の場合 (13例)

- | | |
|--|--------------|
| ・ man unde wip ⁽⁸⁾ 6例
(wip unde man) | ・ 王と廷臣達 2例 |
| ・ 娘と妻 | ・ 王と王妃 |
| ・ 夫と妻 | ・ 乙女と女性 |
| | ・ 妹姫とイーヴェイン卿 |

2) S_1, S_2 の一方のみが人間の場合 (2例)

- | | |
|--------|---------|
| ・ 心と婦人 | ・ 名誉と婦人 |
|--------|---------|

3) 身体部位 + lich (2例)

- | | |
|-------------------------------------|--------------|
| ・ ir har unde ir lich | 彼女の髪と彼女の体 |
| ・ ir antlutze unde ir schoeniu lich | 彼女の顔と彼女の美しき体 |

A - 3 超自然的な存在 (3例)

ここでは, S_1, S_2 のいずれか一方が該当すれば, これに含めることとした。

- | | |
|-------------------------|-----------|
| ・ got unde her Gawein | 神とガーヴェイン卿 |
| ・ got unde ir unschulde | 神と彼女の潔白 |
| ・ diu Minne unde ir rat | ミンネと彼女の命令 |

B. 無生物

B - 1 自然現象 (5例)

- | | |
|----------------------------|-------------|
| ・ ein hagel unde ein regen | ひょうと雨 |
| ・ ein regen unde wint | 雨と風 |
| ・ untter sus untter doz | 風のざわめきと一大音響 |
| ・ der hagel und diu not | ひょうとその苦しみ |
| ・ ein siusen unde ein doz | 風のざわめきと一大音響 |

B - 2 具象名詞 (2例)

- | | |
|-----------------------------|-------|
| ・ diu kapelle und der stein | 教会と宝石 |
| ・ schilt unde helm | 楯とかぶと |

B - 3 抽象名詞 (48例)

これらは, 2 個の抽象名詞から主語が構成される用例であるが, これらの組み合わせを両方の名詞の意味から分類することは困難である。それ故, ここでは次のような12項目をたて, S_1, S_2 のどちらか或いは両方がその項目にあてはまればそれに分類していくことにする。また, 12項目いずれにもあてはまらない場合は, その他に入れることとし, 例が重複する場合は 2 回目の例示を☆印で表すことにする。

- ① 名 誉
- | | | | |
|-----------------|-----------|-------------|--------|
| saelde, ere | 幸福, 名誉 | ere, lant | 名誉, 領土 |
| ere, vrume | 名誉, 利益 | triuwe, ere | 信義, 名誉 |
| ere, heil | 名誉, 幸福 | ere, vreude | 名誉, 喜び |
| wirtschaft, ere | 生計(費), 名誉 | | |
- ② 喜び・幸福
- | | | | |
|-----------------|--------|-----------------------|--------|
| ☆saelde, ere | 幸福, 名誉 | ☆ere, heil | 名誉, 幸福 |
| heil, ungemach | 幸福, 不幸 | ☆ere, vreude | 名誉, 喜び |
| vreude, schimpf | 喜び, 冗談 | heil, liebes ein teil | 幸福, 喜び |
- ③ 武勇・戦い
- | | | | |
|-----------------|------------|-------------------------|--------|
| stich, slac | 突くこと, 斬ること | geburt, vrumekeit (高貴な) | 生れ, 武勇 |
| sterke, manheit | 強さ, 勇気 | manheit, sin | 勇気, 熟練 |
| kunst, kraft | (技術)技術, 武力 | unreht, vrumekeit | 不正, 武勇 |
| lant, strit | 領土, 戦い | tugent, manheit | 徳, 勇気 |
- ④ 財産・領土
- | | | | |
|--------------|--------|------------|--------|
| guot, lip | 財産, 命 | ☆ere, lant | 名誉, 領土 |
| ahte, guot | 立場, 領土 | guot, lip | 財産, 命 |
| ☆lant, strit | 領土, 戦い | | |
- ⑤ 命・体
- | | | | |
|------------|-------|--------------|-------|
| ☆guot, lip | 財産, 命 | herze, lip | 心, 体 |
| ☆guot, lip | 財産, 命 | kraft, leben | 体力, 体 |
- ⑥ 心
- | | | | |
|-------------|--------|-------------|---------|
| wille, muot | 心, 気持ち | herze, lip | 心, 体 |
| wille, muot | 心, 気持ち | state, muot | 機会, 気持ち |
- ⑦ 食事・もてなし
- | | | | |
|--------------|--------|-------------------|-----------|
| schimpf, maz | 歓談, 食事 | wirde, wirtschaft | 気配り, もてなし |
|--------------|--------|-------------------|-----------|
- ⑧ 忠告・頼み
- | | | | |
|-----------|--------|-----------|--------|
| rat, bete | 忠告, 頼み | rat, bete | 忠告, 頼み |
| rat, bete | 忠告, 頼み | | |
- ⑨ 友情(友愛)
- | | | | |
|------------|--------|-----------------|----------|
| haz, minne | 敵意, 友情 | herzeminne, haz | 真の友情, 敵意 |
|------------|--------|-----------------|----------|
- ⑩ 恥・不名誉
- | | | | |
|--------------|--------|----------------|-------|
| laster, leit | 恥, 苦しみ | laster, arbeit | 恥, 苦難 |
|--------------|--------|----------------|-------|

unwirde, verlegenheit 不名誉, 怠惰

⑪ 不安・不幸・恐怖

vorhte, ungemach 恐怖, 不安 ☆heil, ungemach 幸福, 不幸

⑫ 怒り・敵意・悪態・脅し

ernst, zorn 真剣さ, 怒り zorn, tobesuht 怒り, 狂気
 ☆haz, minne 敵意, 友情 drô, spot 脅し, あざけり
 ☆herzeminne, haz 真の友情, 敵意 schelten, dreun 悪態, 脅し

⑬ その他

zuht, gerich 罰, 復讐 gnâde, gemach 休養, 休養
 hitze, stanc 熱, 悪臭 hulfe, rât 助け, 助け
 reht, hohcvart 潔白, 慢心 güete, tugent 優しさ, 長所
 meisterschaft, huote 支配, 監視

以上のことから明らかなように、 S_1 、 S_2 のいずれか一方にでも、生物が位置する場合は20例(26.7%)、両方が無生物の場合は55例(73.3%)と、数の呼応が崩れているのは、主語に無生物が置かれる場合の方が多い。

また、主語が同じ条件で、動詞が複数形の場合⁽⁹⁾と比較すると、 S_1 、 S_2 両方に人間が置かれる場合は13例：5例、両方が抽象名詞の場合は48例：7例となっており、いずれの場合も数の呼応が崩れている場合の方が用例数は多いが、特に、抽象名詞が主語に置かれる場合は、数の呼応が崩れやすいと言えそうである。

iii) 主語が3個以上の単数形の名詞から成る場合

(表-8)

A. 生物(0例)			B. 無生物(4例)		
A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3
0	0	0	0	0	4

(表-8)から明らかなように、主語が3個以上の単数形の名詞から構成される場合は、主語に抽象名詞がくる用例のみである。

V. まとめ

以上、Mhd.期における主語と述語動詞の間の数の呼応を分析してきたわけであるが、まず第一に指摘することができるのは、いわゆる表面上の数の呼応の崩れの多さである。特に、主語に単数形の名詞 S_1 、 S_2 が位置するときは、75例：14例と圧倒的に単数形の動詞が置かれる場合が多かったが、このことは必ずしもMhd.期の言語使用者が文法を無視することが多かったということを示してはいないであろう。つまり、Mhd.期においては、単数形の S_1 、 S_2 に対して複数形の動詞を置くことより

も、むしろ単数形の動詞を置くことの方がより適切な呼応の手段として認められていたのではないかということである。用例の乏しさからこれ以上の言及は不十分であるので、今後、幅広く他の資料をも検討し、このことを確証したいと考えている。

最後に、本稿で明らかになった点を挙げてまとめとしたい。

- 1) 主語 sg.・動詞 pl.の場合は、意味による呼応及び補語による Attraktion が見られる。
- 2) 2個の単数形の主語 S_1, S_2 に対して、単数形の動詞が置かれるときは、動詞が主語に先行する場合が多く、複数形の動詞が置かれるときは、主語が動詞に先行する場合が多い。
- 3) S_1, S_2 が人間である場合も、抽象名詞である場合も単数形の動詞が置かれることの方が多いが、特に後者の場合は、この傾向が一層顕著である。

注

- (1) 但し、次のような例は、(表-1)から除いた。

・同格表現

und wann daz in sîn geverte もし彼の仲間である邪悪な悪魔が
der übele tiuvel nerte, 彼を助けなかったら, (Iw. 4675-4676)

・明らかに動詞が省略されていると考えられる場合

unz ich ersterbe und die drî 私があなたの復讐をするために三人を
an den ich iuch rechen sol: 殺し、私自身を亡き者とするまで,
(Iw. 4240-4241)

・一見、2個の主語が並んでいるように見えるが、2番目のものは形容詞で、主語名詞を修飾している場合

wan dâ wonte in armuot そこでは、貧窮の中にも分別と礼儀が住まって
bescheiden wille unde guot. いたからである。 (Iw. 6297-6298)

・単数形の主語をさらに S_1 unde S_2 の形で、内容の説明をしている場合

unz daz dort her vür spranc そこから、城主の家来である、若く
des wirtes samenunge, りっぱな騎士達と小姓達が、
schoene unde junge 跳び出してくるまで,
junkherren unde knehte, (Iw. 304-307)

上記の訳文並びに、本論中に付した訳文は、参考文献にあげた書物を参考にして、筆者が付けたが、場合によっては、「ハルトマン作品集」からそのまま引用したのものもある。

- (2) 後述される論理上の主語を受ける、形式上の主語 'ez' のことである。
- (3) 以下、韻と記したものは、すべて脚韻のことをさす。
- (4) これらの用例は、次の位置に出現する。

2003-2005, 2710-2711, 3016-3019, 3387-3388, 5907-5909, 5956, 7015-7020,
7021-7022, 7029-7031, 7307-7308, 7491-7492, 7493-7494, 7505-7507, 8139-8140,

- (5) Grimm (1967), S.221-232
(6) 主格以外の格をさす。
(7) 文中の語が近くの他の語に影響されて、数・格・人称などの呼応において特異な現象を生ずることを言う。
(8) 文脈から、「男と女」の意味を表す場合(1例)と「誰もが(jedermann)」の意味を表す場合(5例)とに分けることができる。
(9) 主語が2個の単数形の名詞から成り、動詞が複数形の場合の S_1 , S_2 及びその意味は、次の通りである。

・人間+人間(5例)

wirt, Gâwein	城主, ガーヴェイン	man, wîp (2例)	男, 女
maget, Iwein	乙女, イーヴェイン	künek, küneginne	王, 王妃

・人間+動物(2例)

er, lewe (2例) 彼, 獅子

・抽象名詞+抽象名詞(7例)

minne, haz (3例)	友情, 敵意	lîp, lant	命, 領土
trûren, haz	悲しみ, 敵意	vreude, minne	喜び, 友情
höfscheit, güete	分別, 心の善良さ		

使用テキスト

Benecke, G. F. und Lachmann, K. : Hartmann von Aue, Iwein, 7. Aufl.
Neubearbeitet von Wolff, L., Berlin, 1968

参考文献

- Benecke, G. F. : Wörterbuch zu Hartmanns Iwein, Göttingen 1833-Neudruck der Ausg. von 1874, Wiesbaden, 1965
Benecke, G. F. und Lachmann, K. : Hartmann von Aue, Iwein, 6. Aufl.
mit Anmerkungen, Berlin, 1962
Grimm, J. : Deutsche Grammatik IV, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1967
Mettke, H. : Mittelhochdeutsche Grammatik, 3. Aufl.
Veb Bibliographisches Institut, Leipzig, 1970
Paul, H. : Deutsche Grammatik III, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1968

Paul / Moser / Schröbler / Grosse : Mittelhochdeutsche Grammatik, 22. Aufl.
Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1982

Weinhold, K. : Mittelhochdeutsche Grammatik, 2. Aufl.
Ferdinand Schöningh, Paderborn, 1967

池上嘉彦 : 「意味論」, 大修館, 1975

泉井久之助 : 「印欧語における数の現象」, 大修館, 1978

五島忠久 : 「数と性」, 研究社, 1980

相良守峯 : 「中高ドイツ語文法」, 南江堂, 1981

平尾浩三 / 中島悠爾 / 相良守峯 / リンケ珠子共訳 : 「ハルトマン作品集」, 郁文堂, 1982

付 記

本稿は、第15回西日本言語学会（1985年9月7日、於広島文教女子大学）にて口頭発表した内容を改訂・増補したものである。